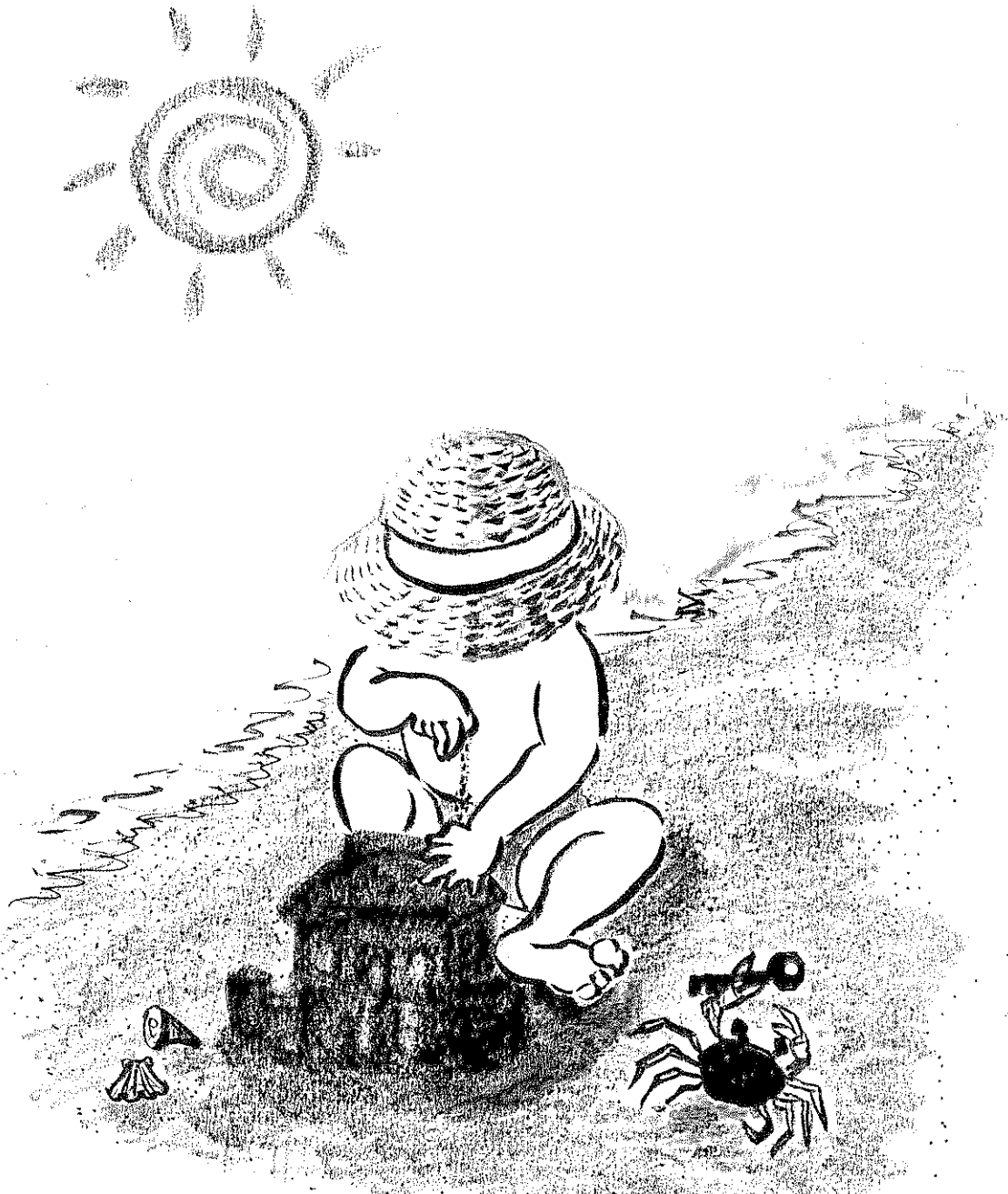


---

# 住・まちづくりフォーラム かわら版(仮題)

ニューズレター第4号 1994年9月2日

---



特集 第4回住教育フォーラム

○人が知的になるとはどういうことか

—認知科学の領域から住まい・まちづくり学習へのメッセージ—

発行/財団法人 住宅総合研究財団

4

## 第4回 住教育フォーラムの記録

主催 (財)住宅総合研究財団 住教育委員会

テーマ 人が知的になるとはどういうことか  
—認知科学の領域から住まい・まちづくり学習へのメッセージ—

- ・日 時 7月1日(金)午後6時～9時30分
- ・会 場 当財団会議室
- ・講 演 東京大学教育学部教授 佐伯 胖 氏
- ・コーディネーター 熊本大学工学部教授 延藤 安弘 (住総研住教育委員会委員長)
- 〃 東京学芸大学教育学部教授 小澤 紀美子(住総研住教育委員会委員)
- ・ファシリテーター 千葉大学園芸学部助手 木下 勇 (〃 委員)
- 〃 筑波大学付属小学校教諭 町田 万里子(〃 委員)
- ・記 録 跡見学園短期大学家政科講師 加藤 仁美 (〃 委員)
- 参加者 建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、まちづくりなどの活動家、関心のある主婦の方など42名



▲司会・進行役の小澤紀美子先生

### 次号予告は裏表紙に

- ・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。
- ・また、今回のフォーラムの案内状も兼ねています。裏表紙をご覧下さい。

- ・表紙デザイン、裏表紙カット＝町田万里子
- ・編集・文責＝事務局 間宮昭朗、小菅寿美子、平井なか

# 第4回 住教育フォーラム

## 「人が知的になるとはどういうことか」

楽しく学ぶ AOL

Legitimate Peripheral Participation  
(正統的周辺参加論)

### LPP理論

東京大学教育学部教授 佐伯 胖

LPP理論とは、Legitimate Peripheral Participation という英語の頭文字を取ったもので、正統的周辺参加論という意味で、従来の学習という概念を根本からひっくり返した考え方です。

まず第一に、学習というのは、誰かから教えられるということではなくて、生きて成長する中で自然にやっている、人間の最も自然な営みである。町づくりという前に、コミュニティや環境の中での町学びが人々の中にちゃんとある、そういう状況から考えようということです。

もう一つの大きなひっくり返しは、社会との関係です。学びの一番の源泉は社会であって、社会との関係の中で学びは生まれている。学習というのは、権威ある知識なり体系を飲み込んでいくとか、身に付けていくというのではなく、その人が関係を拡げていくことである。それは、地域の人々との関係であったり、自分自身との関係であったりする。特に権力的な関係の中では、学習は抑えられる。ある意味では学習というのは、権力関係のひっくり返しなのです。

もう一つ非常に重要なのは、コミュニティということに常に考えなければいけないということです。どういうコミュニティを前提にして考えるかによって話は変わってくる。例えば、住んでいる人たちが、その地域のコミュニティを前提にして、そのコミュニティの中でより知的になり一人前に文化の実践者として育てられていくという想定でいくのか。あるいは、ここに居るコミュニティも活動の場も違う人たちが、町づくりについてどういうふうに関心していったらいいのか。

つまり、LPP理論とは、一種の社会学なのです。学習を社会学的に見るということです。学習というのは社会的な関係づくりであり、社会的な関係の中で発生し、そして社会的な関係を変えていこうとする、まさしく社会的な営みなのです。いわゆる心理学的主義とはだいぶ違い、むしろ文化人類学とか、人類学的な視点で学習をとらえています。もともとこの理論を提唱したLaveとWengerは、いずれも人類学者です。だから、学ぶということは、その人自身がどういうコミュニティでどういうふうに関心して一人前に中心的な活躍をする人物として成長していくかということだと考えるわけです。学習観を非常に社会的な文脈の中でとらえるということが出発点になっているわけです。そうすると、学校で今まで行っている学習観というのは非常に人為的であり、本当の自然な人々がお互いに学び合うような関係の中での学習ではなくなっているといえます。ここでは、それを告発するということではなく、地域の人たちが学び合っていくということはどういうふうに関心していかないことができるかということから考えたいと思います。

私の乏しい建築関係の知識の一つとして、東大の高橋研究室の研究の一端をご紹介します。それは、文京区の



根津近辺と練馬区の光が丘団地の子供たちの生活環境と遊びについて、建築学的、環境学的観点から研究したものです。

文京区の根津地域は、非常に狭い道が入り込んでいる所ですが、子供たちは常に道で遊んでいます。道で遊んでいると、よそのおじさんが何となく話しかけてきたり、駄菓子屋の前をたむろしていると色々な種類の人たちと出会い、話し込んできたりする。地域の中で、世代間を越えた交流、学校間を越えた遊びが非常にナチュラルに行われている。(初めて会う人たちが何となく出会ってしまう、絶えず見知らぬ人と出会っていて、見知らぬ人を見知らぬ人でなくなっていくような関係づくりというのが非常にうまくできている。)これはどういうことかということ、コミュニティの中に、色々な先輩、後輩、新参者、地域に長く住んで歴史を知っていて、「昔はあそこはこうだったんだぞ」と言える、そういう人たちが連続的につながっているのです。ですから、その中に入ると新しく引っ越してきた人でも、色々な人と話し込んでいくうちに、今度は見知らぬ人がいたらすっと声が掛けられるような関係ができてくる。そして、自分はこの地域の住民になっていっているという実感を持つ。自分自身がこの地域の中で一人前なんだというアイデンティティができていく。何があっても心配ない、わからないことがあったら誰に聞けばいいかわかっているという関係ができてくる。そういうコミュニティというのが、学び合いが非常にナチュラルに状況的にうまくいった例であるといえます。

ところが、光が丘団地の場合は違います。少なくとも子供の遊びに関しては、遊ぶ集団が固定しています。学校だとか学年単位での遊びになって、学校の延長になっている。いつも同じ所で、一定の人たちだけがある時間遊んだらあとはパッと塾かどこかへ分散してしまう。そういう所では、遊ぶ活動の場も広がりを持たない。世代間を越えるとか、別のコミュニティと一緒にいるとか、

自分がその地域で、文化やいろいろな価値などの様々なことについて、だんだんわかっていくというような関係づくりの構造になっていない。学びが閉ざされている。そうすると、そこに何年住んでいてもアイデンティティがない。本当の意味でのコミュニティの全体像が見えない。人間が一人前になっていくってどういうふうなのかということを経験していくような構造を持っていないということになります。

地域とか住まいに住んでいるということは学んでいるということ。その学ぶということ自身が疎外されていたり、おかしなことになっていたりしてはいないだろうかということを経験していかねばいけない。これが重要な点です。

コミュニティの中には、必ずある意味での権力構造というものを潜在的にもっています。ある権力体制を維持しようと思ったら、人を学ばせないのが一番いいのです。例えば、地域でも新しくきた人たちが戸惑っても何も教えてあげないとか。

地域や職場でも長くいる人は、中核的存在になります。その人が絶対的権力を持っているということとは違います。その周辺にいる人は全く新しい異文化を背負って参加する人です。周辺にいる人と中核にいる人が対等に意見交流できる。学び合いが権力関係を越えて、いろいろな所にネットワークが広がっていくということが大切です。私たちが、地域の中である参加の軌道が見えるかどうか、この話はどこまで通じていってどういうことまで繋がっていきそうかということが見えているかどうか、コミュニティに参加することの重要な条件になるわけです。

コミュニティなり地域なりが学び合っている場になるのか、それとも学ばせまいとし合っている場になるのか。どんな世界でもどんな分野でも、すべての人がそのコミュニティの中で一人前の人間としての活動の場がありそうだという実感をもつことを妨げようとする面と、うまくやろうとする面と、常に両面を持っているということを経験していただきたいのです。

配布したプリント「教育的環境とは何か」というのは、日本認知学会の教育的環境のデザインという分科会ができたときに、記念シンポジウムで話した際のレジュメです。今申し上げているような発想の学習観を説明しています。

(1) ピアジェの理論では、頭がよくなるというのは、頭の中に構造ができあがるのだとか、言葉が定着するのだとかというふうに考えている。これをやめて、ものを考えるということは、他者や外界と交渉していることであり、その交渉の中で我々が常に新しい意味を発見したり、新しい交渉のスキルを身に付けたりしているのだと考えています。

(2) 学んでいるということは、知識が頭の中に入るということではなくて、その人が一人前になること、全人格的なものです。その社会、コミュニティ、地域で、自分が活かされている、私が私であるという実感をもって、そのコミュニティに一石を投ずることできるような人間になっていくことです。今の学校教育で、子供たちが本当にそういう実感をもつ学びをしているかどうかというと、暗い気持ちにならざるを得ません。

(3) 記憶や思考、問題解決のスキルというのは、文脈から切り離されたものではなくて、絶えず他者との共

同作業である。私たちがこれでいいのだと実感するのは、誰かに言われていいのだと思うのではなくて、共同体の中での手応えなのだということです。たしかにそれでうまくいきそうだとか、なるほどなということが事実として実感できるということ、そういう価値とか意義というものが生まれて、こちらに戻ってくるようなときに、私たちは学習意欲を感じる。学習は、手応えを感じていく世界なのだということです。

(4) コミュニティの参加ということが学習なのだという捉え方です。学習者は必然的に新参者同士、あるいは古参者、親方とかその道のエキスパートもいますが、そのエキスパートとの権力関係の制約を受けつつも、それらとのコンフリクトを通しての共同体意識のつくりかえ(再生産)、成員間の世代交替(置換)ということをもたすものでなければならない。世代交替というのは、やはりコミュニティを活性化していく上で必要なことなのです。

(5) 学習を動機づけているのは、外的な報酬でも、好奇心というものでもない。参加しているのだ、自分がその中で関係を作っているのだという実感と、行き先の気配を感じる(prolesis)ということが起こってくることです。

(6) 要するに十全的活動へのアクセスだということです。情報が閉ざされているのではなく、情報が得られること、あるいは何か活動しているときに、活動を広げていく手段が常に利用可能である。いろいろな道具立てがあって、それは何かをやるための道具であると同時に、やることによって意味がもっと広がって見えていく。閉じたコミュニティの中で、お互いに仲良くというだけでなく、そのことを通して今まで知らなかったもっと外の世界の意味が見えてくるというような活動であれば、その学びには、文化的透明性がある。つまり、文化のつながりや広がりがずっと見えていくような状況にあるということになる。

しかし、このLPP理論に、私なりにいくつかの疑問をもっています。

一つは、このLPP理論の出発点になっているのは、徒弟制の研究なのですが、実践共同体というものが実体化して存在しているように見えるけれども、実際は学習者が最初にいるときには自分自身がどこの共同体に属するかわからないということがある。

また、異なる共同体が重層的に重なり合っていたりということがある。例えば、学校の理科ならば、科学のコミュニティ、数学のコミュニティが重層的に重なり合っている。それを一人の子供が色々な関係で学んでいくときに、自分の中でコミュニティ間の関係ということが、当然コンフリクトとして起こってくるわけです。そういうコミュニティ間の問題もあるだろう。

さらに、誰か他者という者がいて、その仲間がいるから私がここにいるのだという、そういう非常に親しい誰かとの関係とコミュニティの関係をもう一度考えなければいけない。

LPP理論では、親とか教師というものが妙に教え込もうとすることが、コミュニティの本来の学びを壊すとされているのですが、実際は本当に良い育ての導き手だっているであろうという考えがあるわけです。

要するに、(1) 実践共同体というのは制度的に存在しているとは限らない。私たちの意識の中でしかないのかもしれない。意識そのもの、共同体感覚みたいなもの

が生まれてくるようなきっかけもあるということを考えていきたい。(2)それから共同体の導き手ということがあるだろう。教育という営みは、やはり考えなければならぬと思っているわけです。

次に、私が提唱している「認識のドーナツ論」の説明をします。

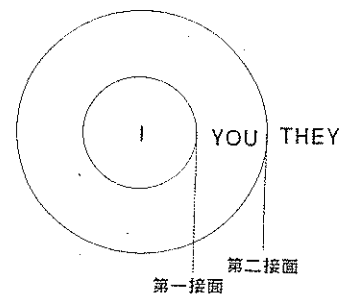
人間が学んでいくときは、一人称「I」から始まります。一人称の世界が保障されていないような世界だと、学びははじまらないわけです。つまり私は私であっていいのだとか、私自身のこだわりということをもまず出発点に考えたいということです。それが学校教育の場合には、一人称の世界がものすごく殺されているということがあつた。私はこう思うということではなくて、みんながどう思うかということばかり考えてしまう、そういう中では学びは始まらないのです。私は、学習とか理解という言葉よりも、「学ぶ」とか「わかる」という言葉を使います。全部一人称で言い換えられるからです。意欲、態度、関心などというのは最近の流行言葉で、それを育てる教育などとよく言いますが、それはすべて三人称的な表現になっています。そういう三人称的な目で学習を考えるというのが、まずいのです。まず、私が私として何がやりたいのか、自分を一人称として自覚することから学びが始まるのです。

それに対して「YOU」という二人称的世界がある。YOUというのは、学習主体と二人称的に関わる他者ということです。この二人称というものは、学習者に対して協力的であり、意義の先読み的に関わってくる。何となく先の世界を見せてくれる。その人は、私の立場に立ってくれるし、私自身の感じていることを一緒に感じてくれる。しかし、その人自身はもう一つ奥の世界、私の知らない世界も知っているみたいだ。そういう人との関係のことを「YOU」といっています。

そして、そういう関係ができることを「第一界面」と呼んでいます。例えば、地域に何となく心を許せる他者がいて、それで地域のコミュニティの中で私がまず第一歩を踏み出せる。それが第一界面になるわけです。お互

いにYOUになりえる関係、お互いに共感し分かり合えるような関係が、「出会い」なのです。そういう人との出会いが、やりやすい関係づくりになっているかどうかということが大事なのです。地域の中で、色々な人と色々な接触できて、何気なく言葉を交わし合えるような関係がその中にあるかどうか、YOUを見つけ合う関係ができるかどうか重要です。

三番目が「THEY関係」です。YOUとTHEYとがどういうふうにつながっているのかというのが、「第二界面」と呼んでいるものです。つまり、YOUと繋が



認識のドーナツ

っていることで、その後ろの世界、もっと本当の文化だとか、世の中、世界など本当にそこに実在している世界を私たちが垣間みることができるかどうかということが、第二界面なのです。そこで、まさしく一般的な他者というか、見知らぬ他者の存在、あるいは別の地域の人とかを垣間みることができることになります。

その「垣間みる」ということを私は「proleptic」と呼んでいます。これは言語学の言葉で、未来の出来事を現在または過去のこととして記すことを言います。予見法という先々起こることを今の時点でとらえる、意義の先取りのことです。何となくわかっているみたいな感じで振る舞っているうちに、だんだんわかっていくという感じですが、単に調子を合わせることや物まねとは違う。どこが違うかということ、第二界面が見えているかどうかという点です。単なるごっこ遊びで、それが閉じていて、「rule of game」が完全に固定しているならば、そこではいくら色々やっても、世の中のもっと先のこと、「future unknown activity」は見えてきません。見知らぬこれから起こりそうなこと、様々な力関係だとか、非常に困難な障害、逆に面白いことやいいことが予見できていくようになっているかどうか大切です。それは、「activity」が「proleptic」になっているかどうかと関わりがあるのです。

IがYOUとかかわり合う活動というのは、合理性とか合目的性ではなくて、むしろ遊びとか楽しみに近い。つまり世界を模索し、視点や立場を自由に交換したり、前提をあえて変えてみたりすることで、その制約の持つ意味がみえてくる。ゲームをルールのように遊べる世界を明確にして、安心して没入することも保証される。

ところで、このようなYOU的存在は、実際には相互的に関係的に創発するのであって、どちらかが一方的にYOU的に振る舞うのではなくて、いわば出会いとして互いにYOUになり合う関係として出現する。すべての人間が生まれながらにして潜在的に他者に対してYOUになろうとする特性を持っている。



ここで、学習者の I と Y O U のどちらかの方が権力を持っているということもあり得る。しかし、そこで権力がむき出しになって迫っているのではなく、相互に共通の良きものをつくり出そうとする生成的な態度となって非対称的になっている。権力関係はあっても、相互の信頼関係があるのです。

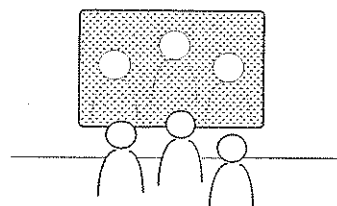
「THEY 世界」は、規範とか価値、あるいは見知らぬ安穏さというようなものであって、私たちの共同体そのものの外側で、共同体を規制している世界ということになるわけです。

再び I の視点から Y O U の見え方を考察すると、夜の電車に映る車内と車外の関係に似ている。Y O U の世界というのは、車内と車外の両方が見えているという点で、半透明の世界である。どういうことかということ、自分がそこで自分自身をみることができるわけです。それと同時に、個人を越えたもう一つ奥にある別のコミュニティが見えてくる。私が、自分自身も見ることができし、その中で語り合うお互いの関係も見える。しかし、もう一つ、夜行列車の外側、本当のリアルな世界というのが、背景にみえる。その中で、自分を含めて、自分自身を映し出す鏡としてその場が感じられる。これが本当の Y O U 的關係なのです。

Y O U 的關係というのは、仲良く和気あいあいというのがすべてかということ、決してそうではない。自分自身を反省してみたり、自分自身を内観してみるという営みと同時に、そのことのもう一つ奥にある世界を垣間みることができるかどうかという関係の中での Y O U 的な世界があれば、それは見事に学習を支えていくのだということなのです。

最後に「接面の硬直化」という問題があります。第二接面、第二接面の間の Y O U 世界、それ自体は媒介的な作用をもつけれども、いわゆる社会一般に開かれた実践の共同体ではない。にもかかわらず、第2接面を全く不透明にして、Y O U が未知なる T H E Y を垣間見せてくれることなく、ただ I との交流だけで単に仲が良いだけというのであれば、生産なき消費のみの活動ということになる。つまり、あらかじめセッティングされた定型化した軌道を辿る運動のみに従事している場合は、Y O U 世界は、擬似的な実践共同体となる。そこでは、共感と親密さの表面的な確認作業だけが中心的活動になる。つまり「オタク化」というわけで、カプセル化して他を排除して独自の世界をひたすら保持し続けるようになる。

Night-Train Window



そこでは、Y O U のみがあって I すらもない、本当の自分という者すらもなくなっていくということになります。

他方、第一接面がほとんど見失われ、I があたかも第二接面に立たされているかのような場合もある。これは、Y O U が T H E Y 化しているわけで、共感性や非目的的な遊びがなくなり、見知らぬ攻撃への恐れと、防衛だけで固められる。ひたすら外界の変化を眺めているだけ、追っているだけで、自分で何かを試してみるとか、自分自身で動いてみるということが全然できない。そのような場合は、Y O U が本来 I に垣間見させる暗示的 proleptic に示すはずの T H E Y 世界の規範性は、意味の文脈を剥奪されたむき出しの権威として迫ってくる。何々べきであるということが、理由や根拠、意味的な裏付けをすべて捨象して、「べきであるから、べきである」として迫る。遊び、実験、探索がなくなり、「なってみる」という仮想的な自己投影も許されない。

こういうところで、Y O U 世界のもつオタク化傾向と T H E Y 化傾向は、I と Y O U の関わり様式を含む文化自体によって、それぞれの強さが規定されるけれども、I や Y O U のそれぞれの歴史によっても規定されるということなのです。

私は、やはり学ぶということを経験的な関係性の中でつくり出していくこととしたならば、あくまで社会に広がりを持っていくような学びの環境づくりこそが、これから考えていかなければいけないことではないかと思うのです。

## Prolepsis とは

Prolepsis: 未来の出来事を現在または過去のこととして記すこと。

ex. He struck her dead. I drain a cup dry.

(修辞学) 予弁法

= anticipation, preconception

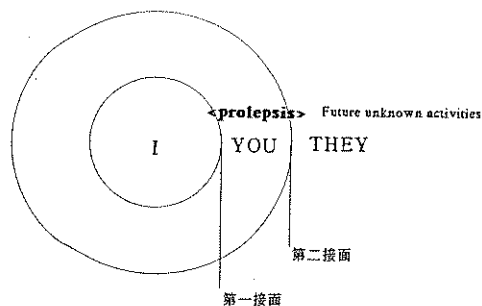
より比喩的に:

- 意識の先取り → 大切そうだ、おもしろそうだ、おいしそうだ。
- (本当は) わかってないけど、わかったかのようにふるまう。

単に「調子をあわせること」や、「ものまね」などどこが違うのか。

「数学者ごっこ」、「科学者ごっこ」でいいのか。

→ 第二接面が予見されているか



# ■ 討 論 ■

( ■ : 参加者、● : 講師 )

■林：自分が一人前になることについて生き生きとイメージできる情報について教えてください。

■大原：学ぶことが、自分を一人前として認めてくれるより良い関係を構築することであれば、プランナー作業に参考になる考え方だと思いますが。

●佐伯：仮想的でもいいから作り手の側になって物を考えるということは非常に大事なことです。(いまある住環境を考える場合でも、それをつくりかえる立場だとか、スクラッチペーパーからつくった人間の立場みたいなことをシミュレーションしてみるのもいい。)例えばペーパーサードなどで、カリカチュア化したコンフリクトをその場で演じていく、仮想の自分をそこに置けるようなイメージをつくると、我々は非常に対象化して突き放してみることができる。そこに、一種のドラマ性があると、ストーリーができたり、色々な事件をシミュレーションしたりしてダイナミックにいろいろな動きを生み出すことができる。道具立てとしては、非常に有効ではないかと思えます。そういう中で、自分というものを非常に対象化して、客観的に自分の位置や意見とほかとの関係が見える。そして参加の軌道が見えてくる。だんだんほかの人とうまくやり合っていく強さ、自分を潰さないで自分らしさ、仮想の自分を出していきながら本当の自分になっていくような方法があると思えます。

■小島：地域となるべく関わりをもちたくないという価値観を持つ人を尊重した町づくりは可能でしょうか。

●佐伯：その人自身と何か行動を共にするようなアクティビティをどこかに見つける、ともに生きているという実感を持つ瞬間をつくっていく、とにかくその人とY O U的關係をまず探し出してつくっていくということが必要です。お互いの高揚だとか価値付けだとかが完全に独立だと考えたならば、何をやっても合意形成を理論的の保証する方法はないのです。共感し合うという人間のダイナミックな営みの中でしか合意形成というのはあり得ません。どこかでお互いが人間同士なんだというIとY O Uとの関係をベースにするような所をつくっていくことが、私たちの考えなければいけないことです。

■伊藤：誰でも学べる環境をこれからつくっていくためには、人間関係といった人的環境に着目すべきなのか、人々が出会える場を設定するという物的環境に着目すべきなのか、どちらが緊急課題なのでしょう。

●佐伯：両方ですが、地域によります。コミュニティに対するインフォーマルなネットワークがある程度できあがっている所では、それを利用していくのが圧倒的にいい。ただ怖いのは、そこには権力関係がくっついてしまっているということです。こういう場合は、環境の側に仕掛けていく、普段と違うアクティビティをポコッと入れてやる。例えば、この会場でやっている貼り紙でもいいし、お絵かきをさせるとか、何か新しいアクティビティの中で違う出会い、発見としての出会いを持たせるような場の中で関係づくりが新しく変わる。そういうアクティビティを是非仕掛けてもらいたいと思えます。

■吉川：特に若年単身者、外国人居住、その地域にアイデンティティを得ていない層をどう考えるか。

●佐伯：単身者とか、外国人とか、それこそ寝るだけに来ている人だとか、そういう人たちには、いわば居場所を与えてあげるといことが大事だと思います。彼らの意見を聴取する以前に、居場所というか、隙間、何か息づける場を与える。そういう人たちが何となく行きやすい場を与えてあげると、そこにはいつの間にかコミュニティが出来上がってきます。コミュニティというのは一色ではない。色々な人が色々な隙間を見つけてたむろできていくという関係の中で全体がある。重要な言葉で「非参加の参加」というのがあります。参加していないということアイデンティティにして、それで参加している。何もかも管理して計画して見えている世界が一番いいのかというと、息が詰まってしまう。見えない世界、陰で何かやっているという世界もある程度容認して、隙間のある空間を用意したり何となく配慮してあげることが大事なのではないかと思えます。

■吉川：隙間をつくってそこに1つのコミュニティをつくると、THEYとTHEYの対立みたいな話が起きますが。

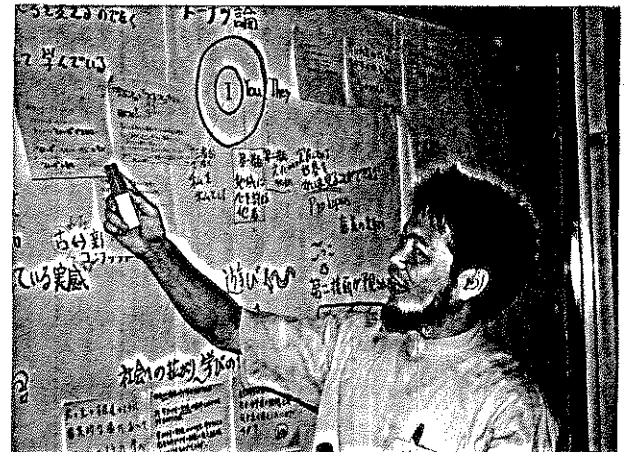
●佐伯：そこで交流なりをして、それぞれの文化の特性を誘導子としてシェアするような場にしないといけな。それがないと、本当にたまり場になって、今度は利益代表みたいな要求ばかりするようになってしまったりする。

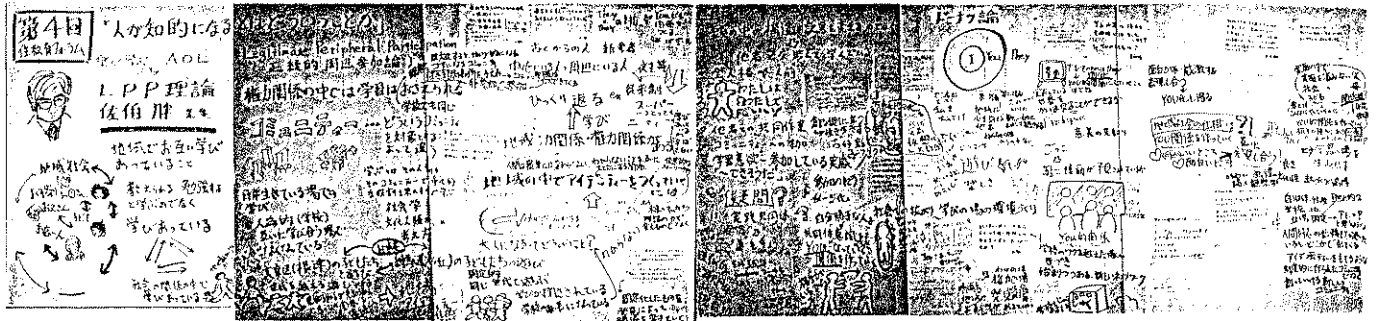
■木下：矢田さん、松本さん、長谷川さん、露木さんから、学びやすい社会、コミュニティの条件とはどのようなものかなど、地域社会での仕掛けをどうしたらよいかという質問が幾つか出ています。

●佐伯：すべては、Y O U關係をどう仕掛けるかということです。何か事柄を発見しようとか調べるとか、共同の営みの中でお互いの面白さとか独特の味わいだとかそれぞれの持っている歴史的な文化性だとか、お互いの良さをアプリシエートし合うような地域であれば、いつでも学習できる学び合いの場が整っていくと思えます。そのY O U環境づくりというのが、学習的な場を生み出すか、それとも権力的なTHEY的な関係を生み出すか、分かれ目だと思っています。

■山田：学びを展開するのに適当な人数、規模というのがあるのか。

●佐伯：巨大化してくるとTHEY化してしまうので、自ずとあるサイズをコアにしていくしかない。でもその広がりには、コアになるコミュニティが幾つかあって、それ全体がまたコミュニティになっていくということもあります。





▲木下委員と町田委員が描きあげたボード

■長谷川：最近、自治会という住んでいる所のコミュニティというのがすごく希薄になってきています。歩いていける距離のコミュニティを考えると、自治会とか小学校区位しかない。そこで、公民館だと学校をよくしようとする、行政とのTHEY的關係が目立ってきてしまう。YOU的關係というのは、なかなか出てこないと思うのですが。

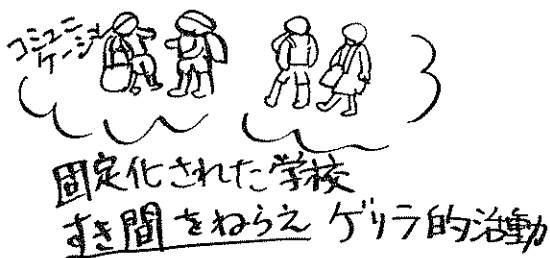
●佐伯：何をやればいいかというのは分からない。例えば、松戸市がやった「すぐやる課」のような、一旦できてしまった制度的な行政と住民の対立的関係をわざと崩してしまふことを始める。我々は、社会というとTHEY的に組織立った構造化した関係というものをとらえてしまふのだけれども、どんな小さなことでも、時間はかかっても着実に伝播していくと私は信じています。

■大月：メディア、新聞、広報誌等は、IにとってYOU的なのでしょうか。

●佐伯：いまあるテレビや放送は、ごく例外を除くとTHEYです。ただ、それを話題の種にしていくことで、YOU的關係に作り直しはできます。面白がるとか楽しみ合うとか、大事だと思ったら感動するとか、Iとしての反応を出し合ってそれをアプリシエートし合うということが、まずYOU的にとらえる出発点だと思います。どんなメディアでもYOU化し得るものとして考えたいと思います。

■山内：学びの場としての現在の小中学校の理想とは何かをお聞きしたいのですが。

●佐伯：学校も、学ぶということは教室の中のことだけではない、いつもほかの世界と関係をつくっていくことだと考え直し始めています。現代的な場で、先ほどの光が丘みたいな地域が固定化していることに対する別の動きも始まっています。例えば、塾の行き帰りが一種独特の遊び空間をつくっている。その中で何となく交流し合っている。完全に環境だけで形づくりをするというふうにはいかない。ただ我々がそういうことに目をつけて、むしろそれを育てていくように絶えず状況をつくり直していくことが必要だと思います。惜げないことに、学校は制度化され、固定化して管理化されて、どうにもならない状況になってしまっている。ゲリラ的な隙間をじわじわつくるしかないのではないかと思います。



▲ファシリテーションボードから

■橘：根津のような環境でも、いろいろな人と自然に出会えるような側面と閉鎖的な側面の2面性が存在するよう思うのですが。

●佐伯：固定的な関係には、YOU的な世界をどうやって新しく発見的に仕掛けてつくりかえていくかが重要です。新しいメディアなり新しい媒体なり、あるいは新参者がどうやっていままでと違う異質な文化をその中でうまく滑り込ませるかということが決め手だと思います。根津的な粘着性の高いコミュニティでは、異質性というものをどうやって取り込むかということが大事だし、光が丘みたいに粘着性が非常に希薄な場合、ほとんど全員が異質ばかりだという場合には、粘着性を付けていくことをどう仕掛けるかが大事です。YOU関係には、第1接面と第2接面と両方あって、第1接面というのは粘着性で、第2接面というのは新しいことに対して開かれることです。結局は、その両面を持ったYOU関係というもののバランスをどうやって仕掛けていくか、ということに帰着するのではないかと思います。

■中村：学習の中で人の考え方が変わるといのは、どのようにして起こるのでしょうか。

●佐伯：お互いに理解し合っているのだけれども、解らないものも持ちあっている、わからないことをわからないとはっきりと相互に認めあっていく限りは発見もありうるし、どんでん返しもあり得ます。「いつもあの人はあなのよ」とか、色分けされてしまっている関係が出来てしまうと救いがないのです。先ほどのペープサードのように仮想的に、本当の自分はどこか別にあるんだよという形で話を進めていくと、絶えず自分を内省できるし、考え直せる。意見も引込めやすいのです。かりそめという感覚を絶えず持ちあった関係の中であれば、学び合いというか、自分の意見を変えようということは起こるのだけれども、ガンと一旦表明してしまった意見を変えようことは、非常に難しい。抜き差しならない事態というものになるべくさせないで、お互いの良さを認めあうという自然に温かい関係の中で思い返しができるときに、発想が変わったり、発見が起こる、そういう形で同意というものが生まれると思うのです。理詰めや力で意見を変えようとか、そういうパスをいかにしてうまくやんわりと外すかが合意形成、相互学び合いの一番のコツなのではないかと思います。

■稲垣：実践共同体がない場合もあるのでしょうか。

●佐伯：ない場合というのは、いわゆる仲間意識だけの擬似的実践共同体の中にみんなが何となく入ってしまっている、そしてアウトプットが分からないというものです。そこから生まれるもの、THEY世界へ向けての働きかけだとかアクションがない、そういう同好会的に集まっている寄り合い的な世界というのは、実践共同体のように見えるけれども実践なき共同体だということがあるのです。マンネリ化しているし定型化しているけれども、コミュニティだけは連綿と持続している。これは実践の共同体とは言えない怖い構造だなと思います。





## 延藤先生の まよめ

(1) 住教育というのは、暮らし学び、町学びではないかという視点が鮮やかに出されていました。従来、住まい町づくりも、仕掛ける側と受ける側、専門家と住民という2つのコミュニティに分かれていましたが、住教育の視点からするならば、専門家と住民、あるいは大人と子供が、1つのコミュニティをいかに形成していくかが大事なのではないのでしょうか。専門家も今までの強い仕掛け、強い計画を反省して、弱い仕掛けとか弱い計画という視点が大事で、そのためには、我々専門家自身が地域や状況の中に参入していく、生きることを学ぶという視点こそが基本的なポイントとなるのではないかということが、全体の議論の中で語られていました。

(2) 学ぶというのは、関係性のデザインではないかということです。1人1人が自分の周りのあらゆる人間、生物、環境とつながっているというつながりの生き生きとした認識の中で、実は相互に浸透し合っている。その共有し合っている関係性の認識が高まっていくときに、その地域に根ざしているという、いわばセンス・オブ・ピロギングといましようか、その場所への帰属感が高まっていくのではないかと。社会全体が、故郷とか地域に根ざしたという状況を切れ切れにしている中で、関係性のデザインという視点は、まさにその小さな地域から宇宙に至るまでの帰属感を高めるといふ、生きることとコミュニティ、住まいを再建設することに向かっての基本的エネルギーを内から育てていくことになるのではないかと語られていました。

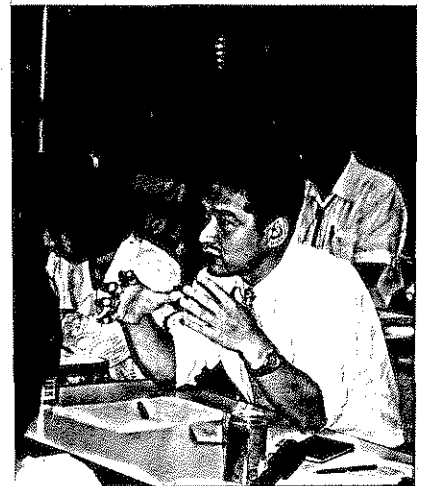
(3) 学ぶというのは、私が私に向かってオープン・エンドな限りなく開かれたプロセスではないかという点です。その点では、外から何々しなければならぬという押しつけがましい「should」とか「must」の世界ではなくて、一人一人が自らの自由なささやき、私はこうありたいという「wish」の世界から始まる。「wish」が高まっていくと、だんだんあれもできそう、これもできそうという気になる「can」の世界が開かれていく。そういう経験が積み重なっていく中

で、私は何々であるという自己のアイデンティティ、まさに自分らしくなっていくという自己発見の旅へ永続的に向かうという気持ちが高まっていく。それが決して1人だけでなく、共同体での多様な地域社会で、住まい町づくりの活動の経験を通してその手応えを感じる。その経験が未来に向かってまたやってみようかなという気持ちを立ち上げていく。いわば、過去の手応えを生成させることが未来を予期する人間的な心構えを膨らませていくのではないかと。そういうオープン・マインドというか、周りに未来に空間時間に、開かれた気持ちを膨らませていくことがきわめて重要であるということが語られていました。

(4) 現代社会では、あちこちで価値の対立が存在する。そこでコンフリクトをエネルギーにして、一人一人の住み手・生活者が小さなエネルギーを紡ぎ出す。対立をエネルギーにしながらYOUの世界をデザインする。そのドラマのプロセスを自らシナリオを書き、演じ、周りの人とその楽しさや経験を分かち合うというその関係が実は大事なのではないのでしょうか。反対意見の人々を排除するというイクスクルーシブな考え方は我々の中に根強くありますが、むしろ反対価値の対立を包み込むというインクルーシブな包括的な関係、YOUの関係にどう立ち向かっていくかということが重要です。

YOUの世界を発見的に仕掛けてつくりかえていく、状況を再創造していくという視点が、排除的なコンフリクトの多い現代社会にあって、むしろそれをエネルギーにしながらYOUのデザインをすることが住まいづくりの心を高めていく上で大事なのではないかと思います。つまり、IとYOUの関わりスタイルを豊かにする中で、物を人と分かち合えるような状況が生成されていくのではないかと、言われていたように思います。

(5) キーワードとして、THEY化状況、YOU化状況というのがありました。社会全体がTHEY化状況である中で、YOU化状況に変えていくためには、一人一人どの人間もが持っている個人の直感とか勘を大事にすること、個人の主観とか生き生きした反応とか感動を大切にするという視点を忘れてはいけないのではないかと思います。現代社会では、客観化されたもの物象化されたものばかりに目が行きがちだったけれども、もって一人一人の人間が持っている主観的な周りに対する良さを分かち合う、評価しあうこと、お互いに内から豊かにし合うということ、そこに学び合う関係のデザインのポイントがあるのではないかと、ということも指摘しておきたいと思います。



テーマ  
まちをあそぶ—アクチュアルな子どもの姿

前回の本フォーラムでは、佐伯先生の「L P P理論」や「ドナーツ論」をおうかがいしました。その中で、人は生き生きとした状況の中で学び発達するということが今までにもまして鮮明になりました。

そこで、今回は、子どもが日常的に、非日常的に回りの環境と自由に多彩にかかわりながら心をときはなち、物的環境と人的環境への感受性を豊かにしていく「まちあそび」の視点と方法に着眼してみたいと思っています。

題して「まちをあそぶ—アクチュアルな子どもの姿」。

まず、児童館に集う子どもらと、日常的にひらかれた遊びの世界のデザインを、時には演劇的に、時にはオリエンテーリング的に行い、多様なアクションの経験の持ち主の北島尚志さん（石神井児童館）にお話をいただきます。

ついで、自治体の側から、非日常的に子どもが身近な環境を相手に遊ぶ手法を「知る区ロード探検」として、そのユニークな実践を重ねてこられた木村邦夫さん（杉並区立社会教育センター）からプレゼンテーションしていただきます。

お二人のお話は、きっと、みなさんを笑いのウズの中にまきこんでしまうことでしょう。

その後、参加者みんなで、論点を出し合い、討議を深め、今後の展望の手がかりをえたいと思います。

ご参集をお待ちしております。

記

- |           |                 |                    |
|-----------|-----------------|--------------------|
| ・日時       | 9月30日（金）午後6時～9時 |                    |
| ・会場       | 当財団会議室          |                    |
| ・講演       | 石神井児童館          | 北島 尚志 氏            |
| ”         | 杉並区立社会教育センター    | 木村 邦夫 氏            |
| ・コーディネーター | 熊本大学工学部教授       | 住総研住教育委員会委員長 延藤 安弘 |
| ”         | 東京学芸大学教育学部教授    | 住総研住教育委員会委員 小澤 紀美子 |
| ・ファシリテーター | 千葉大学園芸学部助手      | ” 木下 勇             |
| ”         | 筑波大学付属小学校教諭     | ” 町田 万里子           |
| ・記録       | 跡見学園短期大学家政科講師   | ” 加藤 仁美            |

- ・ご不明の点がございましたら、下記までご連絡下さい。

財団法人 住宅総合研究財団  
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8  
電話：03-3484-5381 FAX：03-3484-5794  
事務局 間宮 昭朗・小菅 寿美子

お申込は同封の「はがき」でどうぞ

住・まちづくりフォーラムかわら版（仮題） 4  
1994年9月2日発行（非売品）

発行人 大坪 昭  
発行所 財団法人 住宅総合研究財団  
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8  
電話：03-3484-5381 FAX：03-3484-5794

